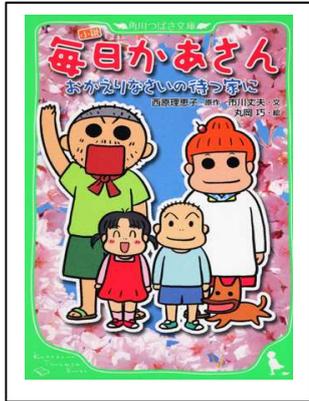


# 図書館だより

旭川市立東陽中学校図書館 N010 2018/12/10 文責 学校司書 三谷

## 図書館まつり 2018 読書エッセイコンクール「金賞」受賞作品 紹介

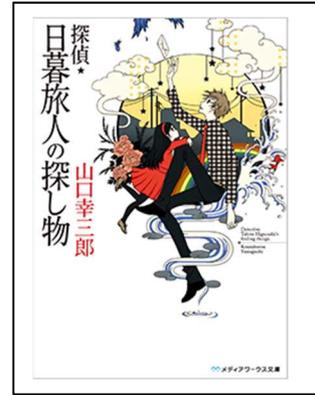


『毎日かあさん』

おかえりなさいの待つ家に



『コーヒーが冷めないうちに』



『探偵・日暮旅人シリーズ』

三年生の部 「金賞」 三年二組 増田初美

〈選んだ本〉

『毎日かあさん』 『おかえりなさいの待つ家に』

作者 西原理恵子

「ありがとう」と言いたくて

家族とはどんな存在なのだろう。そんな風に思うことが時々ある。普段、あたりまえのように過ごしているこの生活。私のそばにいてくれる家族。この本を読むまで私は家族の大切さや優しさをわかっていなかった気がする。あれは私が小学生の頃。父はいつも私が家に帰るとソファに横になりテレビを見ている。話しかけてきても文句を言ったり、ふざけたりが多い。よくわからない人。母は常に明るい人でうるさく感じる時の方が多い。なぜ笑顔でいれるの？と思うくらい。そんな私の父と母。この本を初めて読んだ時は、家族についてもよくわからない事だらけ。何年か経つと、成長しているのか悩みごとが多くなった私。一人過ぎていっていると、何も知らないはずの父と母が私の全てを知っているかのように気をつかい、そばにいてくれる。驚いた半分あの本の意味がわかった気がした。助け合ってわかり合える存在。二人がふざけたりするのは私が元気でいてほしいから。私はこの本に「ありがとう」と言いたいくらい、うれしくなった。

二学年の部 「金賞」 二年四組 主藤 あかり

〈選んだ本〉

『コーヒーが冷めないうちに』 作者 川口俊和

本当に伝えたいこと

もし過去に戻ることが出来るのなら私は誰に会いに行くだろう。家族？恩師？それとも歴史上の偉人だろうか。多分そのどれでもない。私はきつと転校した友達に会いに行く。その子は小学校に入学した時となりの席だった。あまり自分から話かけることはできなかったが、共通の友達と一緒に遊んでいくうちに仲良くなった。ある日その子と二人で遊んでいた時のこと、些細なことで喧嘩になり私は黙って家に帰ってしまった。家に帰る途中その子が追いかけてきていたが気づかないふりをした。次の日、謝ればいい、そう思っていた。だが、なかなか言うことが出来ないまま何ヶ月も一度も口を聞かずに過ぎていった。そんな時、その子の転校が決まり私は謝ることもできないまま、その子は学校を去っていった。それからもう何年もたつが、この本を読んでいると忘れられないあの日のことが鮮明に蘇ってくる。もし、あの日に戻れるのなら戻ってあの子に伝えたい。「ごめんね」と。

一学年の部 「金賞」 一年二組 鎌田 奈摘

〈選んだ本〉

『探偵・日暮旅人シリーズ』 山口 幸三郎

「フィルター」を外して

目に見えない「モノ」を見る。普通、見えないモノが「そこに有る」という。そんな旅人は、「事実」だけを、淡白に物事を見ていくのだろう。私とは、大違いだ。

その時の状態、感情、その人、物に対する思い。その全ての事から、私はフィルターをかけて見てしまう。良く見えるフィルター、悪く見えるフィルター。本当の事とは違う事が、それを通すと見えてしまう。きつと、旅人はそんな見方はしないのだろう。少し、うらやましいかもしれない。

「事実だけ」を見られるのは、本当はいい事なのかもしれない。自分のいいように見たい、というのも確かにある。でも、それは逃げにしかならない。自分を伸ばす事にはならないだろう。自分の、嫌なところ、正しい事を見るべきだ。旅人には、そう思わされた。

「フィルター」を外して、物事を見るのは意外と難しい。けど、自分の為には外してみるのもいい。旅人は、そんな事を思わせてくれた。